抄 錄

結核外專門雜誌

「Ektebin」ニヨル皮膚結核ノ診斷並ニ療法

Dr. Manfred Brückner u. Dr. Gerda Hattenkerl: Ektebin in der Erkennung und Behandlung von Hauttuberkulosen. (Strahlentherapie Bd. 63, Heft 1, 1938.)

Moro 氏ニヨリ記述サレタ Merck 會社製造ノ Ektebin ハ「ツベルクリン」以外ニ人型及牛型結核菌ノ死滅セシメラレタル菌體ヲ含有シ1907年 Moro 氏ニヨリ始メテ小兒ノ皮膚反應ニ試ミラレシ50%ノ Alttuberkulin-Lanolin-Salbe ヲ模造セルモノナリ。

現今 Ektebin ハ通常 Moro 氏ノ「ツベルクリン」試驗トシテ結核診斷ニ廣ク應用セラルルガ又「ツベルクリン」對照試驗トシテ結核性變化ヲ疑ハシメル皮膚ノ局所的診斷ニモ利用セラル。併シ是ハ必ズシモ100%陽性トハナラズ、組織切片ヤX線照射等ノ臨牀的竝ニ一般的診斷法ト同程度ニ利用セラレルノデアル。

1899年 Unna 氏ハ5乃至20%ノ Tuberkulinseife ヲ尋常性狼瘡ニ應用シテ奏功セルヲ見ルガ Ektebin モ夫ニ代ルベキ補助治療劑タルコトヲ Volk, Bujau, Richter, Remenousky, Löwenfeld, Dörffel, Reingardt 及 Hopf 等ノ諸氏ガ報告シテキル。

吾人ハ Ektebin 使用ヲ、次ニ述ベルガ如キ見地ヨリ狼瘡患者ニ使用ス、卽內臟器官ニ活動性ノ結核ヲ有セズ、「ツベルクリン」ニ對スル感受性ヲ有シ而モ患部ニ「ヂアテルミー」金屬導子ノ良ク接近シ得ザルモノ又ハ眼瞼、內眥、耳殼、陰莖、骨膜或ハ鼻孔等腐蝕軟膏若クハ光線療法ガ深部ノ健康ナ組織ニ强イ影響ヲ與ヘ、從テ患部附近ノ感受シ易イ健康ナ臟器ニ障碍ヲ及ボスノヲ避ケルノヲ目的トス。

Ektebin ノ副作用トシテハ「ツベルクリン」ニ對シ非常ニ感受性强キ人ハ其附近ニ一過性ノ浮腫ヲ發生シ、時ニ發熱或ハ疼痛ヲ訴ヘルコトアリ。

Ektebin 療法モ他ノ治療法ト同樣ニ再發ヲ見ルコトハ免カレナイ所デアルガ補助療法トシテハ賞用スベキモノデアル。 (千大皮膚科 三澤抄)

皮膚結核ト肺結核

Kurt Schmitt: Hauttuberkulose und Lungentuberkulose (Strahlentherapie Bd. 63, Heft 1, 1938.)

Bott 氏ハ狼瘡患者427例ニ「レントゲン」檢査ヲ行ヒ、其34.4%(147)ニ著明ナル結核性變化ヲ證明セリ、其內3.7%(16)ハ開放性、空洞性肺結核ヲ、7.7%(33)ハ結核菌ヲ證明スル活動性肺結核ヲ證明シ得タリ。氏ハ又狼瘡患者75例中粘膜及肺臟變化ヲ伴フモノ33例ヲ發見シ、其內6例ハ開放性結核ナリト云フ。同氏ハ525例ノ狼瘡患者ヲ檢査シ他臟器ノ結核トノ關係ヲ次ノ如キ表ヲ以テ示セリ。

骨結核	36
喉頭結核	20
粘膜結核	75
腺結核	127
結核性視器疾患	5

氏ハ狼瘡患者95例ノ近親調査ヲ行ヒタル所、結核性同胞52例、其內44例ハ肺結核ヲ證明セリ、而モ既往症ニ結核ヲ訴フルモノヲ加算スレバ其數實ニ253ナリ。

結論トシテ著者ハ皮膚結核ノ存在セル時ハ本人ハ勿論其近親者ノ健康診斷ヲ行ヒ「レントゲン」檢査ニヨリ肺結核ヲ早期ニ發見シ、結核撲滅ヲ期スベキデアルト云フ。 (千大皮膚科 三澤抄)

狼瘡治療ノ手技的問題

Karl Hoede: Über technische Fragen der Lupusbehandlung. (Strahlentherapie Bd. 63, Heft 1, 1938)

Würzburg ノ Hautklinik ニ於ケル狼瘡患者ハ最近益々增加シ1934年ニ93例ナリシモノガ1937年ニハ278例ニ達セリ。

狼瘡ノ療法ニハ種々アリ、「ヂアテルミー」應用、光線浴、減鹽食等アルモ Wucherpfennig 氏ノ「ヂアテルミー」導子ヲ以テスル電氣切除ガ決定的價値ヲ有スルノデアルガ美容上多少遺憾ノ點アリ。

著者ノ狼瘡治療方法ハ先ヅ局所麻酔法(Novocain)或ハ全身麻酔法(Evipan)ヲ行ヒ、病竈顔面ナル時ハ、深サ0.2cm軀幹或ハ四肢ノ時ハ深サ1乃至2cmノ切開ヲ加ヘ、脂肪組織ハ多少ナリトモ剝離シ、筋肉組織ヲ現ハシタル後腐蝕療法ヲ行フ。而シテ從來ノ如キ所謂Hohlschnitt卽「ヂアテルミー」ノ金屬導子ヲ直チニ病竈内ニ入レルト豫期セザル凝固壞死ヲ起スガ故ニ、著者ハ鑷子ノ助ケヲ借リテ創緣ヲ輕ク引上ゲ緊張セシメタル後「ヂアテルミー」凝固法ヲ行フ。然ルトキハ創面ハ鮮紅色ヲ呈シ腐蝕軟膏ガ容易ニ奏功スルコトニナル。小血管ヨリノ瑣細ノ出血ハ壓迫「タンポン」挿入ニヨリ數分間ニテ止血ス。

切傷ノ後療法トシテ「ピロガロール」應用(10%「ピロガロール」、5%「サリチルワゼリン」、10%「ピロガロール」、5%「クレオソートワゼリン」)ハ治療期間ヲ著シク短縮セシム。「ピロガロール」塗布ト同時ニ「レントゲン」線照射療法(30乃至80 HED)ハ一層完全治癒ヲ促進セシム。 (千大皮膚科 三澤抄)

人型竝ニ牛型結核菌ニ對スル殺菌劑ノ作用(第5回報告)鹽基、鹽類、「エステル」及ビ爾他數種ノ化合物ヲ以テセル檢索

E. Hailer: Die Einwirkung keimtötender Stoffe auf Tuberkelbazillen des Typus humanus und bovinus. V. Mitteilung. Versuche mit Basen, Salzen, Estern und einigen indifferenten Verbindungen. (Zeitschrift für Hygiene und Infektionskrankheiten : 121. Bd. 5. Hebt, 1939)

無機鹽類中食鹽ハソノ飽和溶液ヲ以テシテモ72時間デ猶且ツ純粹培養結核菌ヲ確實ニ滅殺シ得ナイガLithiumchlorid及ビCalciumchloridノ濃厚溶液ハ24時間デ滅殺シ得ル。

有機酸鹽類中Salicyl酸、m-Kresotin酸、Chlorxylenol酸、Chlorthymolcarbon酸ノ鹽類ハ結核菌ニ對シテ一定ノ作用ヲ示シBenzoesäure, Zimtsäure. Phenylpropiolsäure, Chlorkresotinsäure, p-Kresotinsäureノ鹽類ニハ其作用ガ無カツタ。然ルニ一方遊離酸類ハ凡テ既ニ非常ニ低濃度ニ於テサヘモ結核菌ニ作用シ得タ、ソレデアルカラソノ殺菌作用ハ酸「アニヨン」ニ在ルノデハナクテ酸ニ屬シテ居ルモノト謂ヘル。Hydrocuprein及ビHydrocupreinotoxinノ鹽酸鹽類竝ニZephirolト稱シテ市販サレテ居ル四基「アンモニア」化合物ハ結核菌ニ對シテ殺菌作用ガナカツタ。昇汞ハ0.1%溶液デ10分以内ニ殺菌作用ヲ發揮シタ。

鹽基ノ中「アルカリ」竝ニ「アルカリ」性土類(Natrium-, Calcium-, Bariumhydroxyd)四基「アンモニア」化合物及ビ「アルカロイド」中Coffein ト Nicotinノ結核菌ニ對スル殺菌力ハ微弱デアルカ又ハ全然缺如スルガ唯Neurinハ結核菌ノ感染力ヲ可成リノ程度迄減弱セシメル。之ニ反シテ「アンモニア」ト三基ノAmine殊ニTriäthylamin更ニBenzylaminハヨク作用シ得ル。酸「アミド」中Benzamid及ビSalicylamidハソノ殺菌力ハ微弱デアル。

有機酸「エステル」デ檢査シタモノノ中Ameisensäureäthyleysterニハ强イ殺菌力ガアリEssigsäureäthylester及ビPropionsäureäthylesterノ作用ハ弱クCarbaminsäureester(Urethane)ニハ全ク殺菌作用ノ無イコトガ判ツタ。

尙植物成分ノ數種ヲモ檢シテ見タガ、「エーテル」油中Linalool及ビCitronellal, Aliylsenföl更ニCumarin及ビVanilinハ殺菌作用ヲ發揮スルトコロノ2種ノ色素(Methylviolett及ビRivanol)モ亦結核菌ニ對シテハ全ク殺菌作用ヲ缺如シテ居タ。

以上ガ本回ノ報告ニ於ケル成績ノ大要デアルガ更ニ末尾ニ著者ハ第1回報告カラ第5回報告ニ至ル全成績ノ要約ヲ附記シテ居ル。

(九大細菌 占部薫抄)

肢端「チアノーゼ」症竝ニ尋常性狼瘡ノ病變部ニ於ケル溫度測定

Hellmut Hecht: Temperaturmessungen im Bereich von Akrocyanose und Lupus valgaris. (Dermat. Wschr. Bd. 107. Nr. 42, 1938)

慢性肢端「チアノーゼ」症ノ病竈部ニ於ケル正確ナル溫度測定ハ皮膚ノ寒冷障碍ト皮膚結核トノ關係ヲ知ル上ニ有意義ナリ。バザン氏硬結性紅斑及壞疽性丘疹狀結核疹ハ斯ル假死狀部ニ發生固定シ、尋常性狼瘡ハ血行障碍ノ生ゼル部位ニ發生ス。

其蔓延ノ速度竝ニ治癒ノ傾向ガ其部ノ血管ト密接ナル關係ヲ有スルカラ溫度測定ハ正確ヲ期ス必要ガアル。溫度測定器ハMirravi型ノ鏡電流計ヲ用フ。

「チアノーゼ」ノ部位ニ於ケル溫度測定ノ結果ニヨレバ氣溫20乃至21°Cニ於テハ著シク溫度昇ルモ外界ノ溫度ヨリ稍〻高イ程度ナリ。又寒冷刺戟(18°Cノ水ニ5分間)ニ對シテハ水溫ニ迄溫度下降シ其溫度ニ長クトドマルノヲ認メタリ。斯ル檢査ニヨリ動脈系ノ機

能障碍ガ先行シ、寒冷刺戟ニヨリ喚起セラレタル動脈性痙攣アリト想像サル。

以上述ベタル事實ヨリ慢性「チアノーゼ」症ノ患者ノ皮膚ハ外界ノ寒冷ニ對シテ防禦機能ヲ不足セルコトヲ認ム。斯ルガ故ニ「チアノーゼ」ノ部位ガ皮膚結核ノ發生ヲ容易ナラシムルノデアル。

皮膚ノ障碍トシテハ低溫ニヨリ惹起サレタル新陳代謝阻止ガ見ラレ同時ニ血中ニ集注サル代謝物質ノ沈渣ヲ搬出除去スル力ノ不足ガ擧ゲラル。

次ニ尋常性狼瘡ノ病竈ニ於ケル溫度測定ニ關シ、手腕關節狼瘡、顏面狼瘡及耳狼瘡ノ三種類ニ就テ、體溫、病竈部位ノ溫度及隣接健常皮膚ノ溫度ヲ測定シ次ノ結果ヲ得タリ、卽病竈部位溫度ハ周圍ノ健常皮膚ニ比シテ比較的低溫ナリ、コノ事ハ周圍ノ健常部ヨリ本質的ニ低イノカ或ハ急性皮膚炎ト反對ノ狀態ナルカ其本質ハ區別シ得ヌノデアル。特色アリ而モ尋常性狼瘡ノ蔓延傾向ト關係アルコトハ2例ニ於テ罹患皮膚ノ近傍デ病竈ノ方向ヘ向ケ目立ツテ低溫度ヲ示セルコトナリ。

溫度測定ノ結果ヨリ言ヘバ尋常性狼瘡ハ、檢溫的ニハ、皮膚血管系ノ障碍若クハ不完全ヲ物語ル寒性皮膚炎デアル。肢端「チアノーゼ」症トノ共通點ハ兩者ニ明カナル血液循環障碍ガ存在シ、之ガ肢端「チアノーゼ」症ニ於テ皮膚結核ニ對スル誘因タル役目ヲ爲シテキルノデアル。 （千大皮膚科 三澤抄）

痤瘡ト結核

Franz v. Veress: Akne und Tuberkulose. (Dermat. Wschr. Bd. 107. Nr. 52, 1938)

痤瘡ハ日常遭遇スル比較的治癒困難ナル皮膚病ニシテ其原因ハ今日猶完全ニハ明カニサレテキナイ。痤瘡ト云フ名稱ハ綜合概念ニシテ青春期ニ發生スル Acne punctata cum comedonibus ノ輕症ヨリ Acne indurata, aggregata, conglobata faciei et dorsi ノ重症ニ至ル迄幾多ノ段階アリ、A. agminata, cachecticorum, scrophulosorum 等ハ結核性皮膚病ニ屬ス。

痤瘡ノ發生病因トシテハ從來ヨリ內分泌機能障碍、消化障碍及皮脂漏ガ擧ゲラレルガ著者ノ意見デハ夫以外ニ尙他ノ原因ガ存在スルト云フ。

最近ノ文獻ニヨレバ多數ノ權威者ハ痤瘡ノ原因トシテ「ホルモン」障碍ヲ擧ゲ、夫ヨリ生ズル性毒素ニヨリ發生スルト云フ。「ホルモン」說主唱者ハ痤瘡ガ女子月經前ニ規則正シク發生シ、終了時ニ消失シ、中間期ニハ殆ド之ヲ認メ得ヌコトヲ指摘ス。

Bloch 氏ハチューリヒ人ノ小學校ニ於テ 4191 名ノ兒童ヲ檢査セル結果、輕症痤瘡 100%、中等度痤瘡 90% (♂)、80% (♀)、重症痤瘡 19.5—18.0% ナリシト報告ス。痤瘡ノ細菌的病因論ハ現今デハ最早顧ミヌ所デアル。Gougerot 氏ハ之ヲ葡萄狀球菌ニ對スル Hyperallergie ヲ以テ說明セントス。

アメリカノ學者及 Kémeri氏（匈牙利人）ハ所謂焦點傳染說ノ遵奉者ニシテ Kémeri 氏ハ重症ノ A. indurata ヲ扁桃腺剔出ヲ以テ治癒セシメ、痤瘡ノ原因ヲ齒牙或ハ扁桃腺等ノ體內ニ於ケル化膿竈ニヨルモノナリト云フ。

痤瘡發生ノ原因ヲ新陳代謝並ニ消化障碍ニ求ムル人ノウチ Francis 氏ハ癤腫及痤瘡膿疱ハ 14 日間ノ卵無キ食餌療法ニヨリ治癒セシメ得ルト云ヒ、又 Cunningham 氏ハ 42 例ノ患者ニ就テ 165 種ノ食料品ヲ以テ搔爬並ニ皮內反應ヲ試ミテ「アレルギー」現象ノ存在セルコトヲ證シテキル。

Stein 氏ハ痤瘡患者ノ消化腺ノ機能不全ガ解毒分質ノ吸收ヲ不充分ナラシメ、爲ニ發病スルノデアルト云ヒ、又 Meska 氏ハ痤瘡ノ原因ヲ「ヴィタミン」ノ不足ニ歸シ、酸母劑ノ補供ニヨリ良好ナル結果ヲ得テ居ル。

皮脂漏ノ原因的意義ハ痤瘡發生ノ要因ニ非ズシテ丘疹ガ脂漏部位ニ一致シテ發生スルニ過ギヌト云フ。

著者ノ信ズル所ニヨレバ、以上述ベタ種々ノ要因ハ確ニ痤瘡發生ヲ促進セシメ得ルデアラウガ、寧ロ之ハ生體ニ對シテ變質的、誘因的ニ作用スルノミニシテ眞ノ原因ハ結核ナリ。

今玆ニ定型的發疹部位—顏面、臀部、肩胛部及四肢—ノミノ差違ニヨリ痤瘡ト鑑別スル所ノ臨牀症狀ノ酷似セル結核疹ヲ考ヘテ見ルニ、表在性ノ Folliklis ハ一種ノ痤瘡膿疱ヲ以テ、又 Aknitis ハ皮下結節ヲ以テ始マリ、後ニ皮膚ニ癒著、化膿シテ大ナル定型的痤瘡膿疱ヲ形成ス、此膿疱ハ多クノ場合中心ニ面皰栓子ヲ有セヌノガ常デアル。兩者ノ組織學的所見ニ於テモ類似點多ク、亞急性或ハ慢性汗腺炎ヲ證明ス。結核疹ハ殆ド常ニ非特異性ノ毛囊周圍浸潤ヲ有スルコトガ特徵デアルガ、是ハ完全ニ結核性特性ヲ缺如シテキル。古キ痤瘡丘疹ニハ屢々圓形細胞ノ浸潤ト同時ニ結核性構造ノ痕跡ヲ認メ得ルノデアル。

數年來著者ガ觀察セル注目スベキ事實ハ痤瘡患者ガ

亞熱性ヲ示シテキルコトデアル。斯ル現象ハ初メハ偶然事ト考ヘタガ後ニブカレストデ3年間98例ノ患者ノ體溫檢査ノ結果、孰レノ患者モ殆ド全部ガ發熱セル事實ヲ經驗シタ。著者自ラ檢溫セル76例ノ患者中4例(5.4%)ハ無熱ナルモ殘餘ノ72例(94.6%)ハ亞熱性ヲ示ス。斯ル72例ニハ通常何等ノ結核性徵候ヲ認メルコトナク辛ウジテ種々ノ程度ノ貧血ヲ證明スルニ過ギヌ。重症ノ A. indurata, conglobata 等ニ於テハ重篤ナル貧血ヲ伴ヒ、又輕度ノ惡性貧血ヲ隨伴スルモノデアル。

痤瘡患者ニハ屢々放任サレタル肺尖加答兒、肺門淋巴腺結核、肋膜炎等ノ結核性既往若クハ「インフルエンザ」ノ既往症ヲ有シ、夫レニ罹患後痤瘡丘疹ノ發生セル事實ヲ知リ得、通常痤瘡患者ハ虛弱者或ハ肥滿者ニシテ淋巴性體質ノ者ガ多イ。

Griesbach 氏ハ 12810例ノ肺結核患者中其41%ニ痤瘡ヲ證明シ、又他ノ報告ニヨレバ、臨牀的健常者ニハ其0.27%ガ痤瘡患者ナルニ反シ、結核患者3015例中其35.5%ニ痤瘡ヲ證明シタト云フ。斯ノ如ク痤瘡ハ最モ屢々結核ニ隨伴スル疾病デアル。

1930年 Ramel 氏ハ痤瘡ハ血行性結核ノ一輕症デアルト發表シ、之ヲ融解性結核ニ比較シ、痤瘡ノ原因ガ結核菌ニ因ルト云フ動物實驗ノ結果、之ヲ强調シテキル。卽16例中9例ニ於テ未ダ膿疱化セヌ丘疹中ニ抗酸性桿菌ヲ證明シ、10例ノ接種海猽ノ中6例ニ重症結核ヲ見、更ニ再接種ノ結果毒力强キ結核菌ノ培養ヲ得タリ。Ramel 氏ハ又臨牀的ニ殆ド健常ナル青年ガ尿中ニ蛋白ハ證明セザルモ一過性ノ結核菌尿ヲ排出シタコトヲ記載ス。

Ravel, Milian 及 Sabourand 氏等ハ痤瘡ノ病原菌トシテ結核性ノ Ultravirus ヲ考ヘテキル。Oppenheim 氏ハ A. conglobata ノ患者ガ結核反應陽性ニシテ Gerson 氏食餌療法ニヨリ著シク輕快セルコトヲ報告ス。

上記ノ報告例ニヨリテモ痤瘡ト結核トガ或關係ヲ有スルコトハ明カデアルガ、著者ノ經驗セル痤瘡患者ノ亞熱性タル事實ヨリシテ結核ガ原因デアルコトガ確認サレルノデアル。而シテ A. juvenilis, vulgaris 及他ノ諸型ヲ結核疹ノ群ニ編入セントスルモノデアル。事實播種狀血行性結核病ハ痤瘡患者ニ見ラレル如ク、例外無ク年少者ヲ侵スモノデアル。果シテ然ラバ如何ナル種類ノ結核ガ痤瘡ノ原因タルカノ問題ニ對シテハ、痤瘡患者ニハ通常微弱ナル結核性徵候ガ認メラレルコト及著者ノ試ミタル胸部X線撮影ノ結果ヨリスレバ、是ハ多クノ場合、乾酪變性セル肺門或ハ腸間膜腺ガ關係セルモノノ如シ。

著者ノ痤瘡ニ對スル治療的經驗ニ照シテ見ルモ結核說ハ首肯セラレルノデアル、卽從來ノ如キ皮脂漏ノ治療、「ホルモン」療法或ハX線照射療法等ハ一時病氣ヲ輕快セシメ得ルガ、決シテ全治セシメ得ナイノデアツテ石英燈照射、海水浴、日光浴等ヲ全身若クハ局所ニ適用スルコトニヨリ著明ナル效果ヲ擧ゲ、尙「カルチューム」、「ヴィタミン」、鐵、砒素、燐等ノ强壯劑ハ根治的治癒ヲ齎スモノデアル。

（千大皮膚科　三澤抄）

一般學術雜誌

結核菌ノ鷄卵內分離培養法追試

占部薰, 中川洋(東京醫事新誌 3126號)

最近 G. I. Wallace 及ビ M. R. Weissbuch 兩氏ハ喀痰等ヨリノ結核菌分離培養用培地ノ比較研究ヲ行ツテ居ル際ニ培養ノ簡易迅速化ヲ計ルニ鷄卵內ニ培養スル方法ヲ試ミ、著者ハ氏ノ法ノ追試ト從來ノ卵培地ヲ用フル方法トノドチラガ實際價値アルヤヲ見究メル事ヲ主眼トシテ實驗ヲ行ヒタルニ無精鷄卵ノ中デハソレガ生卵ノマヽデアツテモ、半熟ニシタモノデアツテモ亦全熟ニシタモノデモ其ノ中ニ結核菌含有材料ヲ注入シテ培養セバ結核菌ハ大體培養20日頃ヨリ比較的ヨク發育シテ來ルカラ此ノ方法デ分離培養ヲ可能デアル其ノ際人型結核菌ト牛型結核菌トノ間ニ增殖ノ差ハ餘リ無イ樣デアル。半熟卵內ガ結核菌發育最良好ニテ生卵內ガ之ニ亞ギ全熟卵內デハ可成リ發育ガ劣ル又卵白內ヨリ卵黃內ニ於テヨリヨク發育ス、鷄卵內デ結核菌ガ發育スル場合ハ肉眼的集落モ作ラナイシ、亦其他增菌ニ隨伴スルト思ハル樣ナ特殊變狀ヲモ招來シナイカラソノ發育ハ假迄顯微鏡ノ助ヲ藉リナケレバ證明出來ナイ程度ノモノデアル。ソノ發育

ハ到底 Petragnani 氏培地上ニ於ケル發育ニ比ス可クモナク從ツテ、結核菌ノ鷄卵内分離培養法ハ在來ノ人工卵培養地ヲ使用スル方法ニ比シテ決シテ勝ツテ居ルトハ謂ヘナイ、況シヤ Wallace 及ビ Weissbuch 兩氏ノ言フ樣ニソノ方法ガ結核菌ノ分離培養法ノ簡易法デアルカモ知レナイニシテモ尠クトモ迅速法デアルトハ如何ニシテモ謂ヘナイデアラウ。尤モ、人工卵培地ノ用意ノナイ樣ナ場合ニハ鷄卵殊ニ半熟卵ヲ用ヒテ結核菌ノ分離培養ヲ行ヘバ假令培養ニ要スル日數ハ永クカヽルトシテモ極メテ簡易ニ確實ニ其ノ目的ヲ達スル事ガ出來ルカラソンナ際ニハ本法モ試ミテ然ル可キモノデアルト思フト述ブ。

(東京市療 川上抄)

補體成分特ニ人血清補體ニ關スル研究(第2回報告)

今堀肇(東京醫事新誌 3126號)

著者ハ「オプソニン」ト補體成分トノ關係ニ就テ研究シ一、二ノ知見ヲ得タレバ之ヲ茲ニ報告セントスト述べ結論トシテ次ノ如ク述べラル。

(1)攝氏 56度ニ8分間加熱シテ補體ノ非耐熱性成分ノ作用ヲ失ヒタル海猽血清、竝ニ酵母ニヨリ補體第三成分ヲ非働性ナラシメタル海猽血清ガソノ「オプソニン」作用ヲ失フ事ハ周知ノ事實ナレドモ、Gordon 等ハ海猽血清ヲ「アンモニア」ニテ處置シ、補體第四成分ノ作用ヲ消失セシムルモ、ソノ「オプソニン」作用ハ減弱スルコトナシト稱ス。然ルニ余ノ實驗ニヨレバ海猽血清ヲ「アンモニア」ニテ處置シテ補體第四成分ヲ非働性ナラシムル時ハ海猽血清ノ「オプソニン」作用ハ著シク減弱ス、但シ細菌ノ種類ニヨリテハソノ「オプソニン」作用ノ減弱ノ程度比較的輕度ナルモノモアリ。ナホ酵母處置ニヨル外海猽血清ヲ細菌ニヨリテ、ソノ補體第三成分ヲ非働性ナラシムル時モ亦同樣ニ「オプソニン」作用ヲ失フ。

(2)人血清ニ於テモ攝氏 56度ニ8分間加熱スル時ハ著シクソノ「オプソニン」作用ハ減弱ス、「アンモニア」處置人血清ニ於テハ使用菌種ニヨリ其ノ成績多少異ナレドモ一般ニソノ「オプソニン」作用ハ減弱ス、但シ「アンモニア」處置人血清ニ於テハ概シテ、「アンモニア」處置海猽血清ニ比シ「オプソニン」作用ノ減弱スルコト比較的輕度ナリ。

(3)攝氏 56度8分間加熱海猽血清ニ「アンモニア」處置海猽血清ヲ加ヘル時ハ著シク「オプソニン」作用ヲ恢復ス。然レドモ攝氏 56度8分間加熱海猽血清ニ酵母處置海猽血清ヲ加ヘシモノ、及ビ酵母處置海猽血清ニ「アンモニア」處置海猽血清ヲ加ヘシモノハ何レモヨク溶血性補體能力ヲ恢復スルニ拘ラズ、「オプソニン」作用ノ恢復ハ極メテ微弱ナリ。但シ反應時間ヲ延長スル時ハ是等ノ喰菌數モ比較的著明ニ增加ス、人血清ニ於テモ攝氏 56度8分間加熱血清ト「アンモニア」處置血清ヲ混ズルモノハ著シク「オプソニン」作用ヲ恢復ス。

(4)新鮮血清ニヨル「オプソーン」檢査ニ際シ異種ノ動物ヨリ得タル白血球ヲ使用スル時ハ血清ト白血球トガ同種ノ動物ヨリ得タル場合ニ比較シ喰菌數著シク減少スト。 (東京市療 川上抄)

放射性食鹽ノ研究(其二) 放射性食鹽ヲ以テセル結核性淋巴腺炎ノ治療ニ就テ(豫報)

澁谷研究室 澁谷巍,宇都宮廉子. 東京工業大學. 竹内時男. (東京醫事新誌 No. 3125, 19—22.)

食鹽(0.85 g)ヲ(24時間及48時間)「ラヂウム」一定量 0.5 mg ヲ以テ Bombard セシメ可及的速ニ之ヲ 0.85 %ノ割ニ水ニ溶解セシメ、澁谷ノ創製セル組織培養器ヲ用ヒ、本液ノ結締織細胞、大單核球、淋巴球ニ及ボス影響ヲ檢シ、各々夫等各細胞ノ發育阻害セラレルヲ見タリ。尙本劑ヲ家兎靜脈ニ注射シ、各臟器ニ著明ノ充血、淋巴腺組織ノ退行變性、脾、肝、骨髓ニ於テノ刺戟現象顯著ナルヲ見タリ。

竹内ノ法ニ依リ一定量ノ純「クロールナトリウム」ヲ採リ之ニγ線ヲ Bombard セシム事一定時ノ後 0.85 %ノ割ニ水ニ溶解シ、之ヲ滅菌後一淋巴腺結核腫瘤毎ニ其大小ニ應ジテ 0.5—3cc 宛ヲ腺實質内ニ注射セリ。之ヲ3例ニ試ムルニ、イヅレモ、驚ク可キ著名ノ萎縮ヲ見タリ。副作用ト認ム可キモノ無シト。

(東京市療 長谷川抄)

「ツベルクリン」ノ有效因子ニ關スル研究 (其ノ五) BCG 培養濾液 PSS ノ免疫學的意義

九州帝大細菌學敎室 戶田忠雄,村田正夫. (東京醫事新誌. No. 3127, 8—11.)

生菌タル BCG ガ、數多ノ死菌製劑ニ比シ有力ナル免疫元デアル事實。Calmette ノ云フ、BCG ニヨリテ生ジタル免疫性殘存期間ハ、BCG ガ淋巴腺中ニ生存シテ排出セラレザル間ナリノ言。BCG ヲ加熱ニヨリ死滅セシメルトキハ、結核感染ニ對シ防禦力ヲ發揮シ得ズトノ今村、高橋ノ認メシ事實。是等ハイヅレモソノ分泌質中ニ存スル PSS ナル「ポリサッカリード」

性物質ノ作用ヲ考ヘレバ、自ラ氷解セント考ヘ、BCG培養濾液ニ就テ、分劃ヲ行ヒ、ソノ PSS 及ビ人型 PSS ニ就テ、健康海猽42頭ヲ7群ニ分ケ實驗セリ。カクシテ(1)體重ノ變化、(2)「ツベルクリン」皮內反應、(3)强毒菌接種局所ノ變化、(4)剖檢所見ヲミ、次ノ如キ結論ヲ出セリ。

(1)BCG 加熱死菌ノ免疫力ハ、生菌ニ比シ弱イガ、多少ノ免疫力ヲ有ス。(2)BCG ヨリ得タ PSS ハ、或程度ノ感染防禦附與力ヲ有ス。(3)BCG 死菌ニ、BCG ノ PSS 或ハ人型菌ノ PSS ヲ添加スル事ニ依リ、ソノ免疫元性ヲ明ラカニ增强ス。(4)人型結核死菌ニ、是等物質ヲ添加セシ場合モ同樣。(5)人型菌 PSS 及ビ BCG ノ PSS ガ、互ニ共通的免疫賦與力ヲ有スルコトハ、BCG ノ抗元性ガ、ソノ「ビルレンツ」ガ弱キニ比シテ强キコトヲ物語ル一證左デアルト。

(東京市療 長谷川抄)

粟粒結核症經過中弛緩性半身不隨ヲ惹起セル小兒腦幹神經節部結核ノ1例

慶應大學病理學敎室 角井臻. 慶應大學小兒科敎室 國岡辰男. (東京醫事新誌. No. 3127. 34—38)

結核性疾患ヲ共ニ有セル父母ノ子、6年10ヶ月ノ女兒、昭和5年(5歲)慶應病院ニテ瘰癧ノ治療ヲ受ケ、昭和5年(5歲)X線撮影ヲナシテ肺內淋巴腺腫脹ノ診斷ヲ受ク。昭和7年8月(7歲)口ガ歪ミ、步行ノ際右足ヲ引クモ何時シカ治癒セリ。同年11月初旬同樣ノコトアルモ治癒セリ。同年同月17日突然奇聲ヲ發シテ倒ル。意識明瞭、顏面潮紅セズ、言語障碍、右側半身不隨、右側顏面神經痲痺、失禁、體溫39.4°C 四肢ノ搐搦、肝腫脹、脾腫脹アリ。同月26日慶應病院ニ入院。

項部强直ナシ。右側腹壁反射缺損。右側手足ノ弛緩性痲痺狀、知覺障碍、右足膝蓋腱反射消失、ピルケ氏反應陰性、便ニ結核菌、「チフス」菌共ニ陰性。

12月ニ入リテ初メテ捻髮性羅音聽取、12月3日午前10時7分死亡。同日午後1時、胸部竝ニ頭部ノX線撮影ヲナシ、又同時ニ腰椎穿刺ヲナセリ。X線胸部撮影ニシテ粟粒結核ナルコト確認、頭部撮影ニテ異常ナシ。腦脊髓液ニハ病的變化ナク、結核菌ヲ認メズ、ワッセルマン氏反應陰性。

剖檢ノ結果肺、腸、脾、腎、肝、心、膵ノ各臟器、腦軟膜ニ定型的粟粒結核ノ像ヲ呈シ、且ツ大腦ノ左側線狀體ニ軟化竈アリ。本軟化竈ハ前方ハ尾狀核頭ニ始リ、被殼ノ上方ヲ貫キ、一部ハ蒼球ニ及ビ、後方ハ「レンズ」狀核ニ至ル。組織學的ニハ大體完全壞死竈ノ周圍ニ幅廣キ不完全壞死性軟化竈ヲ認メコヽニ多數ノ粟粒結核散在ス。軟化竈內ハ腦幹神經節細胞、髓鞘ハ共ニ完全消失シ、之ニ代リ星狀膠細胞增殖シ、之ヲ補塡ス、尙動、靜脈ハ結核性血栓性血管內膜炎ヲ惹起セルモノ多數ニ認メ、同時ニ血管外膜炎合併ス。

之ヲ考按スルニ、右側半身不隨、右側顏面神經痲痺、言語障碍、右側知覺障碍ハ左側腦幹神經節部軟化竈ニ依ルト。本腦軟化竈ハ、先ヅ璉斯核線狀體動脈ニ閉塞性結核性血管內膜炎ノ起リタルタメナラント。尙コノ弛緩性半身不隨ハ線狀體部ノ軟化竈ニヨルモノデ、線狀體症候トシテ筋緊張ノ亢進減退ニ關シ、意見ノ一致セザル現今、筋緊張減退說ニ左袒スル一實驗例ナリト信ズト。

(東京市療 長谷川抄)

補體成分特ニ人血淸補體ニ關スル硏究(第二回報告)
第一編 補體第四成分ヲ考慮セル淋疾補體結合反應

今堀豐(東京醫事新誌. 3121號)

余ハ溶血性補體ノ各成分殊ニソノ耐熱性成分ナル第四成分ヲ考慮シテ細菌性補體結合反應ノ陽性度ヲ大ナラシメントシテ、淋疾患者血淸ヲ攝氏56度ニ30分加熱スル通常ノ非働性法ヲ改良シ、攝氏56度ニ5分間豫メ加熱セル後「アンモニア」處置セル血淸ヲ以テ補體結合反應ヲ試ミタリ。ナホ此ノ際抗原ニ關シテ二、三ノ實驗ヲ行ヒ、補體結合反應ノ陽性度ヲ多少大ナラシムル事ヲ得タリ。

諸實驗ノ成績ヲ總括スレバ次ノ如シ。

1. 傳硏淋菌「ワクチン」ヲ補體結合反應ノ抗原トシテ使用スル場合ニハソノ抗體作用强キタメ淋疾患者血淸ト殆ンド補體ヲ結合スル事ナキモ此ノ「ワクチン」ヲ1時間煮沸スルカ、或ハ固形無水炭酸ト「エチール・アルコール」トノ寒劑中ニテ1時間冷却スル時ハ抗補體作用ハ減弱シ、從テ補體結合反應陽性率ヲ多少大ナラシムル事ヲ得ベシ。

2. 淋疾補體結合反應ニ於テ抗原タル淋菌浮游液ニ「レチチン」ヲ附加スル時ハ「レチチン」ヲ附加セザルモノニ比シ陽性率ヲ多少大ナラシムル事ヲ得ベシ、但シ此ノ際非特異性反應モ若干增加スル傾向ヲ有ス。

3. 淋疾患者血淸ヲ從來ノ非働性法ニ從ヒ攝氏56度ニ30分間加熱スル代リニ攝氏56度ニ豫メ5分間加熱セル後之レヲ更ニ「アンモニヤ」ニヨリ處置シテ人血淸中ニ過剩ニ存在スル補體第四成分ヲ除去セル血